

入門講座日程表

開催日：	2018年9月より ★毎週金曜日開催 時間 18:00~20:00 (ただし最終日は例外)				
	9/7	9/14	9/21	9/28	
	10/5	10/12	10/19	10/26	
	11/2	11/9			
	(最終日) 11回と12回を併せて一日のセッションとなります。				
	12/9 (日)	時間 9:00~17:00			
講師：	W・キッペス 臨床パストラル教育研究センター理事長				
	加藤 眞三 慶應義塾大学看護医療学部教授				
	大山 悟 カトリック神学院東京キャンパス教授				
	國枝 欣一 ホライズン・スピリチュアルケア研究所代表				
	鈴木 育三 社会福祉法人 新生会 地域生活支援センター所長				
	盛 克志 カトリック聖アルフォンソ初台教会 主任司祭				
講座担当表と詳しい講座内容は次ページ					
場所	東京四谷 ニコラバレ (地図) JR 四谷駅麴町口 徒歩1分 *注: 最終日 (12/9) のみ会場は『聖霊マリア館』				
参加費	1シリーズ (12回) 12,000円 学生 6,000円				
テキスト	「スピリチュアルな痛み」W・キッペス著 弓箭書院				

<お問い合わせ・申し込み先>

NPO 法人臨床パストラル教育研究センター

〒145-0066 東京都大田区南雪谷 1-17-11

TEL : 03-6421-9613、FAX : 03-6421-9614

e-mail: tokyo@pastoralcare.jp

参加費振込先

郵便振込 00180-3-25413 臨床パストラル教育研究センター

郵貯口座 10170-73048651 臨床パストラル教育研究センター

(郵貯口座同士は手数料無料)

SPIRITUAL SUFFERING EVENING COURSE Vol. 19 2018

TEXT W・キッペス 「スピリチュアルな痛み」 弓箭書院

#	month/day	lecturer	theme	text chapter
1	9/7	加藤	導入 スピリチュアルな痛み マニュアルのない人生を生きること	Prologue
2	9/14	鈴木	スピリット	chapter 1 1,2,3
3	9/21	國枝	スピリチュアリティ・スピリチュアルライブ	chapter 1 4 - 10
4	9/28	加藤	スピリチュアル・ニーズ	chapter 1 11
5	10/5	大山	痛み	chapter 2 I
6	10/12	加藤	スピリチュアルな痛み	chapter 2 II 1-3
7	10/19	W・キッペス	スピリチュアルな痛みの元になる 8つの事柄の理解	chapter 2 II 4
8	10/26	國枝	スピリチュアルな叫び	chapter 2 II 5-8
9	11/2	鈴木	痛みのコントロール	chapter 4 II
10	11/9	大山	医療者のスピリチュアルな痛みと スピリチュアルケアの実践	chapter 5 I、4 I
11	12/9 (日)	W・キッペス	オリエンテーション	chapter 4 III
12			まとめ スピリチュアルな痛み	

※各講師の方の担当日程は変更されることがあります。

臨床パストラル教育研究センター企画 スピリチュアルな痛み

「本来の自分でありたい！」

薬物や手術でとれない苦痛・叫びへの理解とケア 入門講座 12回シリーズ

人は機械ではなく、身体と知性、心理（精神）と心、スピリット（霊）と魂からなっている存在です。現在の社会においては心・霊・魂の存在を忘れがちであり、人生の意義、生きる目的がないがしろにされています。ところが病気など極限状態の時にあらわれる心と魂の痛みや叫び、「なぜこの私が」「これ以上迷惑をかけたくない」「死にたくない」などは治療の医療の対象とはされず、多くの人は苦しんでいます。

WHO はスピリチュアルな痛みとしてこの苦痛への緩和を勧め、諸外国では専門職が医療チームの一員として活動している歴史があります。「なぜこれらの痛みが起きるのか」「何もできないからと気休めの言葉をかければいいのか」等、この研修はさまざまな疑問や患者の叫びに対応することをめざすものです。

テキスト： W・キップス 「スピリチュアルな痛み」 弓箭書院 2009年9月（各テーマの後にテキストの箇所を示しています。）

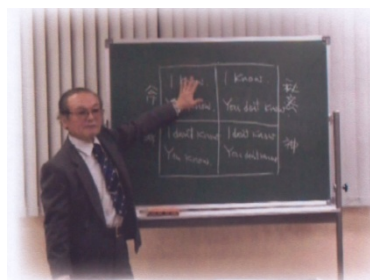
12回シリーズの概要は以下のとおりである。

1 スピリチュアルな痛み Prologue

人生が望ましくない方向に変わってしまうならば、「幸せや幸福」「毎日の忙しさ」「社会や世界の動き」「何のために生きているのか」などの痛みを感じる。家庭の養育や学校の教育は、自他と共に生きること、他者のために進んで損をすること、働く意味や毎日繰り返すことの目的をはじめとして、生きる意味を教えてくれなかった。感謝することや不思議がることの大切さ、五体満足は必ずしも当たり前なことでも基準でもないことを考察させてくれることがなかったのではないか。受講者と共にこうした忘れがちな根本的な事柄を論じていく。

2 スピリットとは Chapter 1,2,3

前述のように人間は他の生物や動物と違って、理性を持ち、自分自身を認識し、善悪の判断ができ、責任を持つことができる生物である。人間の特徴はスピリットにある。太古の時代における人間理解のように、人（ヒト）とは「日すなわち霊（スピリット）」のある「ところ」である。ここでは受講者が自分の存在やその命の意義を求め、その結果自分の存在の意義と尊厳を理解できるように援助していく。



3 スピリチュアリティ・スピリチュアルライフ Chapter 1 4-10

共に生きられるように心・霊・魂のパワーを利用し、尊敬し合い、責任や協調心をもって感謝することは、平和な人間社会を創る基礎となろう。内面的な生き方は自己中心（自分自身さえよければ）や「弱肉強食」、「復讐すること」などにはならないだろう。自他と共に自然を大切に育成していくことが何であるかを受講者とともに考えていく。

4 スピリチュアル・ニーズ Chapter 1 11

身体や心理（感情や情緒）の次元は日常の生活で体験し易いのに対し、心・霊・魂の次元が意識に上ってくることは少ない。生きている中では仕事、日々の繰り返しや忙しさの輪の中で閃き、不思議な出会いや発見のようなものがある。自分自身の人生の意味や世界の歩みにはどのような目的があるのだろうか、というような問いかけが生まれてくる。また、正義、自他を大切にすること、誠実などというような人格の核に関することは、ここで、共にこうした体験を分かち合いながら、より深く生きることを目指す。

5 痛み Chapter 2 I

「どうしたの」「何だろう」「なぜ」「困った」「信じられない」「分からない」など、痛みにはさまざまなものがある。それらは身体的（例：頭痛）、知的（例：パソコンの操作）、社会的（例：正社員になれないこと）、心理（精神的）的（例：人間関係のぎこちなさ）および心と魂、いわばスピリチュアルな痛み（例：生きる目的を失うこと）などがある。それらの痛みを区別することや、その痛みの意味を発見することによって痛みの捉え方は異なってくる。痛みに対してプラス思考かマイナス思考であるかは、生き方に及ぼすインパクトも大きい。

6 スピリチュアルな痛み Chapter 2 II 1-3

スピリチュアルな痛みは「人間（自分自身）を含む存在そのものの意味、目標と価値を見出せず、本来の自分ではなく、置かれている好ましくない現実を超え、あるいは超えさせる希望を与える力や機能がなく、その状態から解放されない。さらに自由意志に基づく良心的な生活を送ることができず、心と魂、いわば全人が患っている状態を意味する」と定義している。これを元にし、人生のグレードアップを計画すればよいと思われる。

7 スピリチュアルな痛みの元になる8つの事柄の理解 Chapter 2 II 4

スピリチュアルな痛みの主な原因として次の8つの事柄が考えられる。即ち、1. 変えられない事柄、2. 現代、解けない謎、3. 現代、解決のできない問題、4. 人間が平等でないこと、5. 喪失すること、6. 善悪、7. 自己の完全無欠の状態 や自己同一性 の不統合、8. 以上の7つの事柄を含む自分自身の存在と存在自体の意味や目的、およびそれらから生じてくる実存的な苦痛・苦難や苦悩、である。それらの原因を把握することは充実した生き方への援助になるとと思われる。

8 スピリチュアルな叫び Prologue 4、Chapter 2 II 5-8

「なぜ」「どうして」「信じられない」「真面目に働いてきたのに、どうしてがんになったのか」「神も仏もない」などの叫びは少なくない。こうした叫びに答えられるのは叫ぶヒト自身である。「なぜ」というのは、自分自身が大切であることの訴えであり、自分の中にスピリットが生きている証拠でもある。受講者が自分の内面的な叫び声を意識することによって、他者の実存的な叫びに対しても敏感になることを目的にしている。

9 医療者のスピリチュアルな痛みと

スピリチュアルケアの実践 Chapter 5 I, 4 I

スピリチュアルケアは心と魂のケアを中心にする行為である。そのためには人間とその次元の理解および区別できることが条件であろう。人間とその次元を区別すると言っても人間そのものは一つの存在であることを忘れてはならない。スピリチュアルな次元は人間を統合させる要因だと思われる。ちなみに、ケアワーカーはスピリチュアルな人間であることがスピリチュアルケアを提供できる前提条件であることを強調したい。

10 痛みのコントロール Chapter 4 II

「痛みコントロール」（一般に「ペインコントロール」と言っている）の専門用語はよく聞く言葉であるが、その理解は不十分のようである。身体的、心理的には健全な痛みコントロールが可能であることは別として、心と魂の痛みの場合、コントロールより解消されることを要求されている。例：赦してもらってももらわないかの痛みに対しては“赦し”のみが解決口になる。だが“赦し”はその痛みそのものをコントロールするのではなく、その痛みからの解放を実現してくれるものである。スピリチュアルな痛みの場合「コントロール」ではなく、「解放」が実現されることを理解して欲しい。

11 スピリチュアルな痛みの元になる8つの事柄へのケア Chapter 4 III

7回目のセッションで紹介した事柄に対するケアを取り扱うことになる。マニュアルはないが、それぞれの問題点は、新しい生き方へのきっかけになりうる。

12 まとめ スピリチュアルな痛み

V・フランクルが言うように「命に意味があれば苦しみにも意味がある」ということばは、特に心と魂の痛みに当てはまる。苦しみや痛みを賛美するのではなく、それらが生きるエネルギーとなるように取り扱うことを勧める。